高等教育の明日

われら大学人

〈67〉

波乱万丈の半生である。江戸川大学社会学部経営社会学科教授の小林至さんは、史上三人目の東大卒プロ野球選手として知られる。プロ野球を退団後、渡米、コロンビア大学経営大学院修了（MBA取得）。アメリカで通訳、翻訳、解説の仕事に従事。七年間のアメリカ生活のあと帰国、こんどは参議院議員選挙に東京選挙区から立候補するも落選。二〇〇二年、江戸川大学助教授に就任。〇五年、福岡ソフトバンクホークスマーケティング取締役に就任。球団経営、チームづくりに携わる。一四年に同球団を退団、再び同大学に戻り教壇に立つ。講義の傍ら、スポーツ庁の大学スポーツの振興に関する検討会議のタスクフォース座長などを務め日本のスポーツ振興のために汗をかいている。「スポーツビジネスは日本では未熟な分野だが、多くの可能性がある。新しい視点で、このビジネスを創造したい」と語る小林さんに激動の半生、現在の大学生活、今後について聞いた。

東大卒プロ野球選手から江戸川大学社会学部教授

小林　至さん（四九）

スポーツビジネスに可能性

球団経営でも実績「学生は、もっと自己主張を」

一九六八年、東京・渋谷で生まれた。小学校は横浜市鶴見区で、五年生から川崎市多摩区に移った。「父親の仕事の関係で子供の頃は引っ越しが多かった」。野球は川崎への転校をきっかけに少年野球団に入る。「ポジションは左利きなので投手兼一塁手、強いチームではなかった」

地元の南生田中学校に進む。「野球部がない中学でした。バスケットボール部に入部したが、やっぱり野球がやりたくてシニアリーグの門を叩いたこともありましたが、練習場が遠くて、結局、卓球部で中学生活を終えました」

高校は、進学校の神奈川県立多摩高校に進む。迷わず野球部に入部した。「野球部は四〇人前後。甲子園出場など夢のまた夢だったが、練習は厳しかった。朝七時からグランド整備で暗くなるまで練習、ケツバットなど当たり前でした」

「家に夜九時に帰れたら早いほうだった。よく耐えたと思う。いまなら、辞めているでしょうね。最初はファーストをやりピッチャーもやったがレギュラーにはなれなかった。それでも野球への情熱は冷めず、大学で野球をやろうと決意した」

勉強のほうは？「野球をやるからには、勉強はいい、浪人してから勉強はやろうと思って、勉強はしませんでした」。高校三年のとき、志望大学が見つかった。

「大学野球選手権に国立の大阪大学が出場、阪大へ進もうと決意しました。早稲田や慶応など東京六大学へ行っても試合に出られないと思っていた。受験勉強を始めたのは秋の文化祭が終わってから」。それで、大阪大受験は失敗。

浪人生活に入る。東大を第一志望に据えた。「東大は東京六大学の一員で、野球のレベルはほかの六大学よりは高くない。東大へ行けば野球が続けられる」。河合塾に通った。偏差値は高校時代の倍近くに上がった。どうして？

予備校で偏差値2倍に

「当時の河合塾は、大学紛争の全共闘崩れのカリスマ講師が何人もいた。私の授業の予習復習を怠らなければ東大は必ず受かる、という先生の教えを守った。四〇近い偏差値が八〇になり、東大模試でベスト八に入ったこともあった」

一九九〇年、東京大学（文Ⅱ）に入学。憧れの野球部に入部。当時の東大野球部は通算二〇〇勝を目前にして六大学新記録となる七〇連敗中。大学二年春に神宮デビューするが、KO負け。六大学通算成績は〇勝一二敗。

「野球部の先輩は『野球四年、勉強四年で八年で卒業すればいい』と言うほどで、午前中は寝て午後練習という毎日で、授業はほとんど出なかった。出席が厳しい語学の単位を落として一年間留年しました」

「プロ野球に行きたい」とマスコミ新聞各方面に話したところ、当時のロッテオリオンズの金田正一監督の耳に入り、金田監督が「おもろいやっちゃ。入団テストを受けなさい」と特別に入団テストの機会を与えられ、晴れて合格。

留年していたこともあり、一年間は練習生で、九二年、ドラフト八位指名で千葉ロッテマリーンズに入団。「レベルが違い過ぎた。運動の神様が野球しているようだった」。プロ二年間で一軍登板はなく、二軍で二六試合に登板し、〇勝二敗。

アメリカで7年間生活

九三年、ロッテを自由契約になり退団して引退。「次のキャリアを何にするか、人生をリセットしたかった」と渡米。九六年にMBAを取得したあと、フロリダ州のケーブルテレビ局「ザ・ゴルフ・チャンネル」で通訳・翻訳・解説など日本向けの番組づくりに従事した。

「会社の人種差別体質を公に批判したため、解雇されました」。二〇〇〇年に日本に帰国。七年間の対米経験を元に評論活動やスポーツビジネスをテーマに研究を行っていた。〇一年、自由連合代表・徳田虎雄氏から誘われ、参院選東京都選挙区から立候補するが落選。

〇二年から江戸川大学社会学部経営社会学科助教授に就任する。「選挙に落ちて仕事もなくなり、家族五人を抱え失意のどん底でした。そんなとき、当時の学長から声をかけていただき嬉しかった」

〇四年、プロ野球再編問題が起きた。メジャーリーグに詳しく、一リーグ制度を唱えるなどしてマスコミにも登場。「取材が縁で、読売巨人軍の渡邉恒雄さんに気に入れられ、ソフトバンクの孫正義さんを紹介されました」

孫さんから誘われ、〇五年から福岡ソフトバンクホークスマーケティング取締役に。経営企画室長、編成・育成部長、広報担当などを務めた。在任中は、同社の黎明期の経営を支えた。チーム編成では、三軍制や成果報酬の年俸制度など、球界の常識を破る独創的な方策を次々と打ち出した。

「編成担当では、内外の大物選手を次々と獲得したり、フロントと現場での大胆な人事交流を促進するなど、刺激的なチーム人事を行いました。王　貞治会長や秋山幸二監督を支えたという自負はあります」

一四年に同球団を退団。「一〇年一区切り、秋山監督も退団したし、そろそろ引き時だと思いました」。福岡ソフトバンクは出向扱いとなっており、江戸川大学に復帰した。現在、社会学部経営社会学科でスポーツビジネスなどを教える。

「プロ野球球団の経営の実務を経験したことで授業にも厚みが出ると思いました。野球を含め、日本のスポーツ振興に役立ちたい。（今の学生？）ものわかりのいい子が増えました。受け身型が多く、自己主張が少ない。そこで、私の授業では課題を出して喋らせ、書かせることを重視しています」

日本版NCAA設置へ

講義の傍ら、政府の各種審議会や委員会メンバーとして活躍する。スポーツ庁の大学スポーツの振興に関する検討会議タスクフォース（TF）座長やスタジアム・アリーナ推進官民連携協議会幹事を務める。

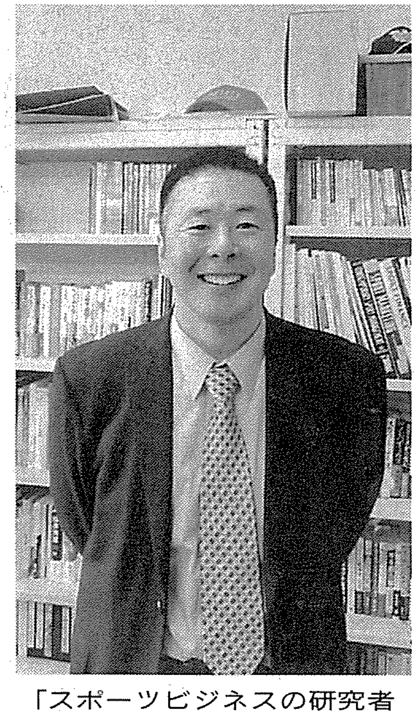
また大学スポーツの振興に関する検討会議タスクフォース（TF）座長としては、現在、日本の大学スポーツをアメリカのNCAA（全米大学体育協会）のような中央統括組織の設置に向けて検討を行っている。

NCAAは一一〇年の歴史をもつ大学運動部の統括組織で、全米の大学一二〇〇校以上が加盟。アメリカンフットボール、バスケットボール、野球、陸上競技などさまざまな競技を統括。全米バスケットボール選手権の収益は一〇〇〇億円を超える。

「日本の大学スポーツの運営は、競技種目別に組織されている学生競技連盟いわゆる「学連」が担ってきました。箱根駅伝も、関東学生陸上競技連盟が主催しています。TFは年度内に関係各団体へのヒアリングを済ませ、日本版NCAAの制度設計を行い、それを実務者に引き渡したい」

自身のこれから。「大学スポーツの振興に関する検討会議もスタジアム・アリーナ推進官民連携協議会も日本のスポーツ振興戦略の一丁目一番地です。スポーツビジネスの研究者としてスポーツの振興、その産業化に寄与したい」

波乱万丈の半生を送ってきた小林さん。日本のスポーツビジネスの研究者、スポーツ振興・産業化の発信者としてそのマウンドさばきに関係者は注目している。取材を終えて確信した。これからは順風満帆、だ。



「スポーツビジネスの研究者としてスポーツ振興、産業化に寄与したい」と小林さん

こばやし　いたる　一九六八年一月生まれ。神奈川県出身。九二年、千葉ロッテマリーンズにドラフト八位で入団。史上三人目の東大卒プロ野球選手となる。九三年退団。翌年から七年間、アメリカに在任。九六年、コロンビア大学で経営学修士号（MBA）を取得。〇一年、参議院選挙に東京選挙区から立候補（落選）。〇二年から江戸川大学助教授（〇六年から教授）。専門はスポーツ経営学。〇五年から福岡ソフトバンクホークス取締役を兼任。連盟担当、営業担当、IT戦略担当などを歴任、一〇年からフロント実務の責任者として、チームづくりに携わる。一四年に退団。『スポーツの経済学』（PHP）、『プロ野球ビジネスのしくみ』（宝島社）など著書多数。家族は妻と二男一女。